

カラコルム山脈・K7西峰南西稜初登攀

横山勝丘（信州大学学士山岳会）

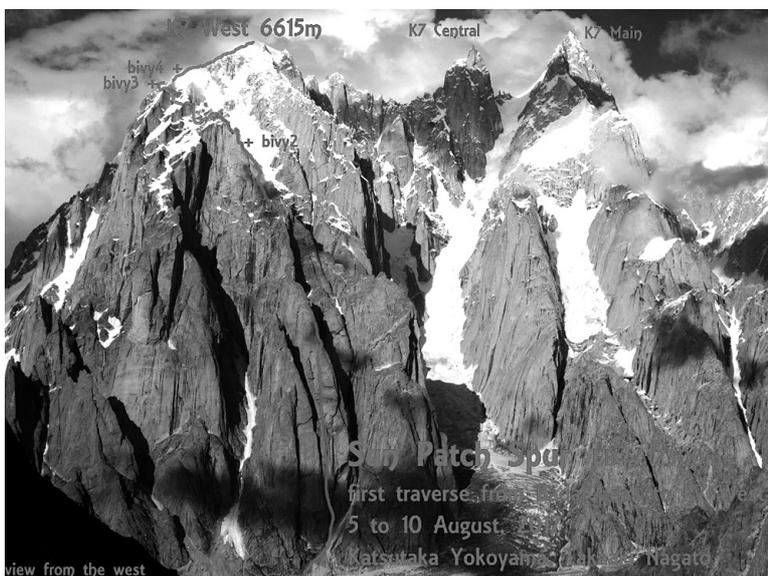
(1) 登攀記録

2014年夏、私は長門敬明、増本亮とともにパキスタンのカラコルム山脈東部、チャラクサ氷河を訪れ、未登のバダルピーク(ca.6100^{ft})からK7西峰(6615^{ft})までの縦走をトライした。しかし、四日間をかけて新ルートからのバダルピーク初登頂には成功したが、K7西峰までの縦走は諦めなければならなかった。2017年、二度目のチャラクサ氷河への訪問は佐藤裕介もメンバーの一人に加わった。増本と佐藤は同じ氷河でビッグウォールフリークライミングを目指し、長門と私は縦走の再挑戦をすることで、二つのチームに分けることになった。

2017年7月。ベースキャンプに着いてすぐに周囲の山で偵察と高所順応を繰り返したが、順応のたびに悪天に見舞われ、結局標高5800^{ft}地点までしかたどり着くことができなかった。長門はベースキャンプ入りしてからというもの体調がすぐれず、順応も

随分と苦勞した。正直言って順応不足は否めなかったが、そもそものベースキャンプ滞在期間が3週間しかなく、私たちに残された時間は少なかった。順応不足には目をつむり、私たちは本番に向けた準備を始めた。

8月2日。ベースキャンプに持ってきていたありったけのロープをかき集め、下部岩壁のフィックス作業に向かった。本来であればベースキャンプから完全なワンプッシュで臨みたいところだったが、下部岩壁は見るからに核心のひとつで、そのために時間を確保する必要があった。また、本番が始まってしまえばフリークライミングそのものを楽しむ余裕はなくなってしまう。一日くらいはフリークライミングを楽しみたいという思いもあって、リードを交替しながら5.11前半までのピッチをこなし、9ピッチ登った小テラスにギアを残置して、持参したロープすべてをフィックスした。



登攀ライン



下部岩壁5ピッチ目(5.11a R)の長門

二日間のレストを挟んだ8月5日。午前3時過ぎにベースキャンプを出発し、明るくなり始めたタイミングでフィックスロープをたどる。前回の最高到達点で、必要のなくなった6本のロープはホールバッグに入れて下に向かって放り投げる（下山翌日、無事に回収した）。ゴーアップを前にして、二人の間でひとつの決め事をした。それは岩壁のセクションはすべて長門がリード。そこから先はすべて私がリードというように、完全に分業制としたことだ。長門のクライミング能力をもってすれば、この岩壁は問題なく越えられるだろう。私は彼よりも体格が大きだけでなく、パタゴニアでの縦走の経験が多く、重荷に耐えて登るのには慣れている。逆に、標高が上がれば順応不足の長門の負担を極力減らす必要があった（その分、彼には下部で頑張るルートを開拓してもらおうという魂胆）。そうやって効率の良さを最大限迫及しなければ、この山は登れない。



下部岩壁25ピッチ目（5.10c）の三ツ星クラックを登る長門

5.10前半までのピッチでは長門が軽いザックを背負い、フォローの私は15kgほどのザックを背負いながらのフリークライミングだ。もっと簡単であれば同時登攀で登り続けたいところだったが、壁は決して傾斜を緩めず、なかなか同時登攀をする機会を訪れなかった。難しいセクションでは長門は空荷でリードし、私は軽い荷物を背負ってユマーリングも交え

つつフォローし、持参した細いロープを使って長門が重い方のザックを荷揚げした。

バットレス上のライン取りは複雑、壁も所々急峻でエイドクライミングも多用した。想像以上に時間のかかるロッククライミングが三日間続いた。三日目の午後からは岩交じりの氷雪壁の同時登攀となった。複雑な懸垂下降を交えながら登り続け、バダルピークの山頂に着くと同時に日が暮れた。



登攀四日目。ここから左の氷壁に懸垂下降してからセラックの下をトラバースした。

バダルピークの山頂で迎えた四日目の朝。ここから先のリッジは、いくつものギャップを従えて岩峰と氷雪壁が交互に現れる。技術的な困難よりも、ルートファインディングが複雑で、懸垂下降や同時登攀などの確かつ迅速なタクティクスの選択が求められた。

リッジの最後に待ち受けるバットレスは、急きょ予定を変更してリッジ北側の大きなセラックの下を通過することに決めた。遠目には恐ろしいものとしか認識できなかった巨大なセラックだが、近づいてよく観察すると比較的安定しているように思えた。

とはいえ、危険がゼロになるわけではない。しかしその危険を受け入れることによって得られるアドバンテージは限りなく大きいだけでなく、他の選択を取ることによって受け入れなければならない危険はまた別にある。この場面では、スピーディに登ることが第一だった。さもなくば、山頂を逃す可能性だつて否定できなかった。

60近いほぼ垂直の懸垂下降で北側の氷壁に降り立ち、傾斜60～65度の氷壁をひたすらトラバースしていく。この通過に二時間近くは費やしたのだろうか。目の前に迫った頂上プラトーへは、高差30に近いセラックの中のクレバスに活路を見出した。長門を迎え入れ、この場所をビバーク地と決めた。テントを設営してもまだ明るかったので、この日のうちに登頂してしまおうとすぐに出発するが、腰までのラッセルを強いられ、歩き始めて10分で諦める。翌日は夜明け前から動き始めるつもりで就寝した。

その晩、強い雪がテントを叩く音で目を覚ました。時間が経つにつれてその勢いは増し、テントをひっきりなしにチリ雪崩が襲う。「果たして明日は頂上アタックできるのだろうか？」不安で眠れぬ夜を過ごす。

四時に起きてテントの扉を開けると、予想に反して青空が見えた。危険な雪の状態を想像していたが、目の前の雪の斜面に新しく積もった雪は少なかった。すぐに準備を済ませ、小さなパックひとつに水と簡単な食料、ヘッドランプだけ入れて出発。

広い雪のリッジを二時間ほど登り、山頂へと続く最後の氷壁は長門に簡単なビレイだけ頼み、ロープを30ほど延ばすと傾斜は緩くなった。周囲には濃いガスが立ち込め、足元さえも良く見えない状況だったので、その場にしゃがみ込んで、数歩先の状況を手探りで確認してここが山頂であると理解した。

簡単に写真だけを撮り、スノーピケットを一本埋めて、私たちは5分で懸垂下降を開始した。テントを撤収し、すぐに北西壁の下降に取りかかる。スノーピケット一本で行なった最初のセラックの空中懸垂は恐ろしかったが、北西壁に入ってしまうと、あとは岩角やVスレッドを使いながら比較的容易に懸垂下降を繰り返していくことができた。途中からは吹雪となり、全身ビショビショになりながら氷河に降り立ち、テントを張った。ようやく生きた心地がした。

六日目の朝。対岸の尾根に登り返し、それから反対側の斜面を下りていった。昼前にはベースキャンプにたどり着き、長い六日間が終わった。

(2) 登攀を終えて

六日間の登攀中、私と長門には楽しかった記憶が一切ない。けどこれほどまでに充実した登山は、私の三十年にわたる登山経験の中でもほとんどないのも事実だ。過去の私自身の登山を、どれが一番難しかったとか、どれが最も面白かったとか単純比較することはできない。しかし一つ言えるのは、今回はこれまでの登山人生の一つの集大成だったということ。難易度とかそういう比較の問題ではなく、今回の登攀では、これまで私たちが培ってきたすべての経験が求められたという意味で。

かつては、酷寒のアラスカやヒマラヤなどで雪や氷に覆われた巨大な山を登り続けてきた。そこでの経験は、ミックスクライミングの技術のみならず、悲惨な状況下でも登り続けるスキルや精神的な忍耐力の向上に繋がった。2008年のデナリにおける継続登攀と2010年のローガン南東壁初登は、その経験が成功に繋がった例である。

それからほどなくして、私たちはパタゴニアのフィッツロイ山群での登攀にフォーカスするようになった。ロッククライミング能力。それも、単に登れるグレードを向上させれば良いわけではなく、長時間スピーディに岩を登り続けられるだけの体力や技術も必要とされる。パタゴニアに5シーズン通うなかで、初登やフリー化などの成果も手にすることができた。そこで得た経験を、より大きなヒマラヤの山でも実践したいというのが、私が熱望していたものだった。私がこれまでに培った経験のすべてが求められるような登山を實踐できてはじめて、パタゴニアでの経験が生きているのだと思った。

いまハッキリと言えるのは、10年前の私たちだったら今回の山は登れなかっただろうということ。下部岩壁は大きく、非常に難しいロッククライミングだった。ここ数年の経験が生きたことは疑いの余地がない。かと言って、もしも私たちがパタゴニアやヨセミテのような岩壁だけを登ってきて、今よりもっと高いロッククライミングのスキルを持っていたとしても、それは今回の登山の成功を確約するものではない。アラスカやヒマラヤで大きな山を登った経験がなければ成し得なかっただろうことは想像に難くない。そういう意味での集大成なのだと思う。偶然にも、今回遠征に参加した私たち四人は全員1979年生まれの38歳。それぞれが、ヒマラヤの大きな山で理想の登攀を実践できたことを喜びたい。38歳である私たち自身を祝福するという意味を込めて、登ったルートをサン・パッチ・スパーと命名した。



登攀を終えて 左より 佐藤裕介、長門敬明、横山勝丘、増本亮

(3) 登攀概要

K7 西峰 (6615^{ft}) 南西稜初登攀 (バダルピーク南面からK7西峰までの初縦走)

Sun Patch Spur

ED+/5.11c R, A2, M5, 90° 2300^{ft}+

2017年8月5日～10日 (8月2日に下部岩壁のフィックス作業)

長門敬明、横山勝丘

バダルピークまでは未登ラインからの35ピッチのロッククライミングの後、同時登攀を含むロープスケール1000^{ft}のミックスクライミング、ならびに懸垂下降4回を挟んで三日間かけて登頂。その先の未登の稜線はロープスケール1700^{ft}の同時登攀と2回の懸垂下降を挟んで山頂プラトーまで達し、2012年スロベニア隊の北西壁ルートに合流。ここから標高差200^{ft}の雪稜を歩き、登攀5日目の8月9日午前9時過ぎにK7西峰に登頂。その後、北西壁を20数回の懸垂下降で氷河に降り立つ。6日目の昼前にベースキャンプに戻った。

(4) 遠征に向けてのトレーニング

本遠征に向けて私たちが行った国内でのトレーニング、山行を簡単に記してみたい。何かの参考になれば幸いである。

私たちが近年、大きな山を登るための武器として同時登攀を多用していることは、登山研修vol.32に記した。当然リスクは伴うが、それによって山に滞在する時間が大幅に軽減された。また、それを継続し試行錯誤を重ねることによって、クライミングスキルや体力の向上にもつながった。

私たちは2017年が始まってすぐに、いつも一緒に登っている仲間たちとパタゴニアを訪れた。長門、増本、佐藤にくわえて岡田康、伊藤仰二という気の合ったメンツで二か月を過ごした。不安定な天候に翻弄されたが、最後のタイミングで私は増本とともにフィッツロイ山群南三座の縦走に成功した。総登攀距離1500メートルにくわえて、複雑な稜線の縦走 (と言っても、5.9レベルは普通に出てくる) を強いられるこの縦走を一日半という短時間で登れたことこそが、大きな収穫だった。それまでだったら、まる二日かけても登り切れなかったかもしれない。同

6. 海外登山記録

時登攀のタクティクスが大きな役割を果たしているのは異論の余地がなかった。

帰国後も瑞牆山を中心に、継続登攀をはじめとした岩登りを長門と実践した。スピードも大切だが、それ以上に体力の向上を目的に、より具体的なトレーニングを積むように心がけた。

4月14日、花崗岩シーズンの手始めとして瑞牆山カンマンボロン・太陽の登(6ピッチ、5.12c)。核心ピッチのオンサイトはならなかったが、はやぶさ6ピッチ目(5.12b、オンサイト)を含む全ピッチを完登。この日私は、連続クライミング12日目であった。

4月23日。瑞牆山ホケイ岩、サイドワインダー(3ピッチ、5.12c)完登。翌24日は太刀岡山フリークライミング(横山)、八ヶ岳(長門)とそれぞれ別行動し、その夜から再び合流して新穂高温泉に移動。25日の滝谷第四尾根は、新穂高温泉～新穂高温泉のラウンドトリップ13時間半。なお、実質の登攀はスノーコルのだいぶ手前から始めている。とは言っても、これは恥ずかしい話だが単に間違えただけ。ルート全体を通して2ピッチで終えた。

二人一緒にトレーニングする日以外の私の日常は、自宅から標高差400メートル登った場所にある岩場まで自転車を漕ぎ、あとはひたすらフィックスロープにぶら下がって未登ルートの掃除と試登に勤しんだ。この作業が、結構全身に効く。下手なクライミングよりもよっぽど強度が高く、一日が終われば、腰回りのヨレが半端ない。それを繰り返した次の日にも瑞牆山や小川山でのフリークライミング。この、レスト日を入れずにとにかく動き続けるというのが良かったみたいだ。長い時は15日ほど連続して登ることもあった。

もちろん連日朝から晩まで登り続けているわけではないが、それでも疲れは溜まってくる。こんなときに目先の成果、すなわち高難度ルートのレッドポ

イントなどを追いかけることはキッパリと諦めることにした。私が目指しているものはもっと先にあるのだと暗示をかけた。にもかかわらず、時折行くボルトルートでは結構成果が出たりするのだから、不思議なものだ。一週間連続で登った翌日に5.13aのオンサイトをしたり、なんだかんだ言って10年ぶりに最高グレードを更新したり(どちらも少し甘めな気はするが)。

5月になると、午前中はカンマンボロンで高難度ルートをトライ、午後は日が当たって条件が悪くなるのでマルチピッチルートの継続登攀に移動、というパターンを繰り返した。瑞牆山の継続登攀では、どうしても緩傾斜のクライミングが主となる。継続登攀それだけでももちろん体の負荷は高いのだが、さらに輪をかけて強傾斜のクライミングも取り入れて全身の負荷を上げようというのが私たちの目論見であった。

6月5日、瑞牆山にて。カンマンボロンの高難度ルートトライの後、ワイルド・アット・ホーム～フリーウェイ～一刀～小ヤスリ岩南山稜(仮称)～Joyful Moment～ベルジュエールの6本継続を5時間50分。

6月16日、甲斐駒ヶ岳継続。黒戸尾根経由でアプローチし、赤石沢Aフランケスーパー赤蜘蛛をレッジ・トゥ・レッジでオンサイト。その後奥壁中央稜を経由して登頂後、下山。16時間行動。スーパー赤蜘蛛は3ピッチ、中央稜は1ピッチで登った。

こういう大きなトレーニングの合間にも、先述の日常トレーニングは継続した。6月下旬からは仕事として富士山で過ごし、高所順応を行なった。富士宮口5合目から剣が峰山頂までを長靴と作業着といういで立ちで1時間半強。特筆すべき速さではないが、ビシッと決めたトレイルランナーをダサイ格好でサラッと抜くのが、私の暗い楽しみとなった。出発直前には富士山頂で一週間生活し、仕事が終われ

ばお鉢を走ったりと、ベースキャンプ入りまでの高所順応も完璧であった。

これまでのクライミング人生で、最もトレーニングをした時期だったと断言できる。当然といえば当然なのだけど、片手間で登れるほど私たちの目指す山は甘くない。だけどこれまでの私を振り返ってみると、ろくにトレーニングもせずに勢いだけで海外の山にツッコンで行ったのは一度や二度ではない。それでも成功することもあった。その度にイイ気になっていたけれど、それはきっと、その程度の山だったのだろうと今となっては思う。四十を目前に控えたいま、まぎれもなく体力の絶頂にあるという確かな手ごたえがあった。そうやって向かったパキスタンで、すべての労力が報われたのは非常に喜ばしいことであった。